

魂の叫び

― 本間俊平 秋吉台の10年

丘
達也

青山ライフ出版

装丁 / 溝上なおこ

明治35年の8月12日、夏の日の朝早く、山陽本線小郡駅（現、新山口駅）に、一人の男が降りた。妻の次子と娘3人と一緒だった。本間俊平、この年29歳、堂々とした体格に力強い眼差し、この土地ではまだ珍しい洋服姿であった。山口県は秋吉の地で、譲り受けた大理石採掘所をもとに、社会的に問題のある青少年や、刑務所から出所し更生しようとする者たちを雇い、事業を起こすためにやってきたのだ。8月9日新橋駅を、親友である浜幸次郎、友部重太郎らが見送った。前夜ささやかな送別会が開催され、俊平の家族の無事と事業の成功を皆で祈った。彼らはキリスト教を信仰するものたちであった。翌日神戸着知人宅に一泊し、11日神戸発馬関行に乘車、この日小郡駅に着いたのだ。山口に着いたこの日は、小郡駅の近くで一泊したあと、翌朝萩行きの乗合馬車で秋吉村（現、美祢市）に向かった。一頭だて6人乗りの箱馬車で、駆者1人馬丁1人がついている。一家と荷物で満員であった。

秋吉に向かう馬車の中で俊平は静かに目を閉じた。

するとこれまでの彼の人生が鮮やかに甦ってきた。彼は新潟県の間瀬村（現、新潟市）に生まれた。貧しい漁村であった。姉が3人いたが暮らしは貧しく、3人とも女中奉公に出された。小

学校では、新潟県の学術優等賞を受けるほど勉強はできたが、12歳で大工見習いとなり働きはじめた。大工修行のため会津に旅立つ前夜、母は言った。

「たとえどんなに辛いことがあっても負けてはいけない。そして、母はいつもあなたのことを見ているから、片時も離れることはないから安心なさい。」と。

翌日母に見送られながら、別れ際一人の罪人が巡査に連れられ首を垂れながら歩いている姿を見た。父と同じぐらいの年であろうか。

「俊助（本間俊平の幼名）や、私たち家族は、ばらばらになってしまい不幸かもしれないが、世の中にはもっと不幸な人々が大勢いらっしやる。早く立派な大工になってそのような方々のために働きなさい。」

その母の言葉を俊平は今もはっきりと覚えている。

それから俊平は働いた。持ち前の勤勉さで3年もたつと一人前とみなされるようになっていた。16歳の時仙台で工兵第二大隊の建築現場で働くこととなった。陸軍の要請で工事を急ぐこととなり、不眠不休の現場作業が続いた。このとき三時間睡眠の習慣を身につけたのだった。

18歳の時はじめてキリスト教に出会った。仙台は松島座で押川方義らのキリスト教演説会が開催された。俊平は日本土木会社に勤めていたが、大工仲間を連れだして会場に乗り込み野次を

飛ばすだけでなく、あからさまに演説を妨害したのだ。最後に出てきた原田助は「主イエス・キリストの愛を伝えるため我々は何も恐れはしない。」と静かに祈り、堂々とステージから降りていった。俊平は、彼らの毅然とした態度に秘かに心動かされた。この時「新約聖書」を買い求め読んだ。イエス・キリストとの初めての出会いであった。

20歳の夏、前の年会社をやめ、一時帰郷していたが、縁あって北海道庁に職を得た。札幌師範学校の建築現場での仕事に従事することになった。そして、俊平を頼って両親がやって来た。間瀬村での貧しい生活に耐えられなかったのだった。十分な収入であったとは言えないが、今から思えば家族3人束の間の幸せな日々であった。

かけがえのない出会いがあった。札幌師範学校の校長代理であった浜幸次郎と仲良くなったのだ。彼は俊平より8歳年上であったが、一生の付き合いとなった。短い期間であったが、浜宅によく遊びにいった。若い教師たちと読書会などをしながら談笑した。(浜は、俊平が秋吉に来てから数年経った明治の終わりが、東京市視学の職にあり、俊平の上京時には必ず泊まることにしていた。長女の武子は浜宅から女学校に通わせてもらった。浜夫人とら子は後にYMC A副会長となる。)

この北海道勤務はわずか9カ月で終わってしまった。俊平にいつの間にか数千円もの大金を収

賄したという噂が立ったのだ。そればかりではない。新聞に毎日のように書き立てられ、犯罪者同様の扱いを受けることになった。(およそ5年後、彼を追放したものが犯人であることが分かった。)どこに行っても雇ってくれるところはなく、生活は苦しさを増した。そしてついに北海道を出る決心をする。年老いた両親とは断腸の思いで、小樽で別れることになった。持っていたお金はすべて両親に渡し、これでなんとか二人は間瀬村まで帰れるはずと俊平は思った。函館に行き車引きや漁師の手伝いなどによりわずかのお金をかせぎ青森へ渡った。そして東京まで10日余り徒歩で踏破した。この間、人家の簡単な修繕などの大工仕事でお金を稼ぐこともあった。また、歩きながら拾ったまだ使えそうな草鞋を片方でも持つておくと、15足ほどの草鞋のセットになった。道で出会った人から売ってくれといわれ、幾ばくかのお金にもなったし、たまたま、草鞋の緒が切れて困っている人に無償であげると大層感謝された。どのような境遇でも人の為にできることあるものだと思つた。そして、ぼろぼろになりながらも次に何をすべきか考えていた。

以前、仙台で勤めていた日本土木会社は大倉組と合併し大倉土木組となつていた。知り合いを通じトップである大倉喜八郎に直談判をした。俊平の情熱に負け入社が認められた。時はすでに明治27年7月より日清戦争が始まつていた。その最中俊平は朝鮮半島に渡つた。大倉土木組は